

## 天声人語

哲学者の梅原猛さんは少年時代、部屋に閉じこもり、一人遊びに熱中していた。将棋盤と駒を使った「野球将棋」である。雑誌でやり方を知り、早慶戦と称しスコアまでつけた。他のスポーツでも将棋遊びを考案し、盤上での水泳や陸上競技に没頭した▼狂気にも似た空想の世界。そこから脱却したのは大に入ってからだったと梅原さんが著書で述べている。「現実世界以外の別の世界を、私はなぜ必要としたのか。この空想世界への耽溺は、現在の学問への耽溺と、どこかでつながってはいはないか」▼梅原さんが93歳で亡くなった。哲学から日本古代、さらには仏教の研究へと進んだ道のりは粹やジャンルとは無縁だった。通説や常識に逆らう学説を次々と世に問うた▼法隆寺は聖徳太子の怨霊を鎮めるために建てられたと主張し、万葉歌人の柿本人麻呂は刑死したとの仮説を投げかけた。専門家から批判も浴びたが、梅原古代学が全国の読者を熱狂させたのは間違いない。我が高校時代も、その凄さを熱く語る級友がいた▼東日本大震災にあたっては、その本質を「文明災」と指摘した。先進各国が原発をエネルギーとするのだから、現代文明そのものを再考する必要があるのだと。スケールの大きな発想を常にする人であった▼88歳で出版した本の題名は「人類哲学序説」である。西洋哲学をさらに研究して、これから本論を書くから「序説」なのだ。知識人としての幅と熱量に比べ、その人生の時間はおそらく短すぎた。